

提

言

農村は子どもたちの 原体験の宝庫



尾木直樹 教育評論家

おぎ・なおき／1947年滋賀県生まれ。中高教員22年、その後22年大学教育に携わる。現在は法政大学名誉教授、教育評論家、臨床教育研究所「虹」所長。2023年4月より東京都立図書館名誉館長に就任。子育て、教育問題に取り組む。テレビやラジオの情報・バラエティー・教養番組に出演し、「尾木ママ」の愛称で親しまれている。『取り残される日本の教育 わが子のために親が知っておくべきこと』（講談社+α新書）など著書多数。

コロナ禍によってさまざまな学びや体験の機会が奪われた子どもたち。尾木さんは、いまこそ五感を通じた原体験が重要である、そして農業や農村はその宝庫であると話します。JAの食農教育、農業体験に大きな期待を寄せています。

■ 子どもたちへの敬意とサポートを

コロナ禍の3年間、学校の教育現場では感染防止のためにさまざまな制約がありました。密になってはいけないということで、小学1、2年生でも、おしくらまんじゅうや大縄跳びもしちゃいけないし、運動会もできなくなっちゃって。体育の授業もほとんどこれまで通りにはできない状況になりましたよね。みんなで歌う合唱もそうです。声を出せないから足踏みして歌いましょうとか。給食の時間もおしゃべりしながら楽しく食べていたのが、全員机を前に向けたまま「黙食」するように言われてきたのです。

私は学校の教師だったから分かるのですが、おしゃべりしながら食べるとか、

子どもたち同士がぶつかり合っけんかするとか、鬼ごっこするとか、成長・発達にとってどれも大事なんですよ。そこを大きくそぎ落とされてしまって……。

あるとき、ある中学生がこう言ったんです。「ぼくたちは学校生活で経験すべきことの半分もできなかつた」って。でも半分どころか3割しかできなかつたと私は思います。それは高校生も大学生も同じ。教育の肝になるようなことを奪ってしまったと感じています。

今年度からようやく日常の暮らしに戻りつつありますが、子どもたちの不安や戸惑いはすぐには解消されません。これまで経験したことがない困難な時代を生きる子どもたちへの敬意とサポートがとても重要だと考えています。成長の機会を取り戻していくために、大人ができることを考えていかなければなりません。



■ 知恵を絞ってピンチをチャンスに

子どもたちは自分の内面と向き合う時間が増えたこともあって、われわれ大人世代には考えられないほど、内省的になったと思います。J Aグループが主催する「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールの図画部門の審査をしましたが、どの作品もとてもいいに愛情込めて描かれていました。自分をしっかり見つめることができている証しです。

それともう一つ、物事を自分事としてとらえる力もついてきていると思います。昨年、審査委員長を務めた全国高校生農業アクション大賞(J A全中・毎日新聞社主催)で、大賞に輝いたのが山形県立村山産業高校でした。現地に行って、生徒たちの取り組みを見聞きして驚きました。かれらは、秋の風物詩である芋煮を、8月から食べたいという地元のニーズがあることを知って、「それじゃあ、サトイモの促成栽培に挑戦しよう」ってことになったんです。トンネル栽培のきめ細かな管理や種芋の逆さ植えなど、いろいろな実験をして作業の効率化と収量アップを実現。芋煮に使えない小さなサトイモも、もったいないからキッシュやコロケパンを開発して活用するなど、SDGsの意識も非常に高い。夏の芋煮の実現に向けたプロセスは見事ですよ。

かれらと話をしましたが、一人ひとりが個性的で自信にあふれて、自己肯定感が高いと感じました。自己肯定感とは、たとえば学校の先生や親から「こうやって

みたらどうか」と言われてやったことが成功しても、それほど高まらないんですね。自分たちで決定することがたいへん重要で、自分で決めたことはたとえ失敗しても自己肯定感が高まるんですよ。

子どもたちは、困難があっても諦めずに粘り強く、それを突破しようと探求します。そして主体的にチャレンジして一つ一つの課題を解決していく。コロナ禍を経験した子どもたちや若者は、これから大きな力を発揮していくでしょう。いわば柔軟にピンチをチャンスに変えていくのです。



■ 学校と連携して食農教育を進めよう

私が強調したいのは、五感を通じて体験する原体験の重要性です。原体験に欠かせないものは、基本的に「火」「石」「土」「水」「木」「草」「動物」「ゼロ」など八つほどあると言われています。たとえば「火」であれば、木をこすって火をおこしたり、キャンプなどで炎を見ていると癒されたりするような体験。また「草」は、草いきれという言葉があるように独特のにおいを感じながら寝転ぶ体験など。「ゼロ体験」もしくは「漆黒体験」と呼ばれるものは、まっ暗闇のなかで星空を眺め、悠久の世界観を感じるような体験です。

こうした原体験は脳科学者によると、脳のコントロールタワーである前頭前野を働かせることになる。いわゆる地頭が鍛えられるそうです。

しかし近年、子どもたちの原体験の機会が減っていることを私は危惧しています。全国の多くのJAで食農体験のイベントを実施していますが、農業体験は原体験の身近な場であると思います。みんなで農作業をしながら、自然と向き合い生命と向き合うという「土」の体験をする。共通の体験によって、コミュニケーションも活発になって、仲間意識が高まっていくのです。

ある市町村の食農教育では、学校のクラスの子どもたちが農家に行ってニンジンの種まきから出荷までを作業して、自分たちで収穫したものを給食に出しています。そして給食の時間になると校内放送で放送委員が育てたニンジンの説明をする。そうすると、子どもたちは完食して残食がなくなるんです。子どもが「ニンジンが食べられるようになった」と言って、親も喜んでくれるそうです。

JAには農家との橋渡しをして学校と連携した食農教育を進めていただけるとありがたいですね。子どもたちが地域とつながるきっかけにもなりますから。

■ 新たな農の価値をつくりだす

私は兼業農家の出身で、作物の生育は台風や大雪はもちろん天候に大きく左右されることなど、自然と向き合う農業の厳しさを子ども時分に感じていました。

政府の政策は、机上の空論にならないよう、農家の声を生かしながら、どういうふうに自給率を上げて、あるいは農家の生産性を上げていくのか、そういう視点で考えてほしいです。

そして、JAは大規模農家も零細農家も含めて、一戸一戸の農家の味方になって、現場の声を吸い上げて、その情報を行政や国に届けていく。まさに真の農家の代弁者になってくれると、うれしいですね。

日本には、全国各地にたくさんの美しい農村風景が残っています。棚田が代表的ですね。美しい棚田を保全するためにボランティアの受け入れやオーナー制度で盛り上げている地域もあります。直接、収益にはつながらないかもしれませんが、日本の風土を守ることにつながって、新たな農の価値をつくりだしています。農村の魅力をさらに発揮して、愛と情にあふれた地域を増やしていきたいですね。

